教職課程センター紀要　第３号　29-36ページ，2018年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.3 29-36, 2018

論　　文

人文学・社会科学分野における専門分野別著者の認知：著者と著者の関連を見据えて
―「東大教師が新入生にすすめる本」を基にエクセルを使った主題アクセスデータベースの作成―

Knowing of the Authors in the Humanities and the Social Sciences
-Building a Subject Access Database using Excel based on "Reading Recommendations from the University of Tokyo Faculty for Incoming Students" -

斎藤憲一郎

Kenichiro SAITO

Key words: 人文学　社会科学、文献収集、専門分野別著者、ガイドブック、東大教師が新入生にすすめる本、主題アクセスデータベース

1　はじめに

自律した学びを進めて行く上で，本との出会いは欠かせません。そんな時，身近なところに使える手掛かりがあると大いに役立ちそうです。

そこで，今回，出版社のPR誌と呼ばれる雑誌に掲載されるガイドブックを基に，専門分野別の著者と本への案内をエクセルによってデータベース化する試みをしました。

本との出会いや文献の収集行動については，人文学，社会科学と自然科学分野とでは少し異なる面がありますので，そうした特徴も考慮してデータベース化の試みをしています。

具体的には，東京大学出版会発行の雑誌『UP』の毎年４月号に「東大教師が新入生にすすめる本」が紹介されますので，この「ブックガイド」(1)を使って自分仕様のデータベース化をしています。(注)

この「ブックガイド」は，東大教師が４つの設問に答えるアンケートの形になっています。

この４つの設問とは，1　私の読書から―印象に残っている本，2　これだけは読んでおこう―研究者の立場から，3　私がすすめる東京大学出版会の本，そして，4　私の著書です。

この４つの設問の１と２には補足説明があります。それらは以下のような文になっています。(2)

１には，「先生方のご専門にかぎることなく自由に」，２には，「新入生が専攻を選ぶときのヒントになる本，その専門分野へのイントロダクションになる本，その分野の研究の奥行きを垣間見せてくれるような本」が付加されています。

これら４つの設問の答えは，自律した学びを進めて行く上では大変重要だと考えられます。特に，「その分野の研究の奥行きを垣間見せてくれるような本」(3)は，これを自ら判断して本を選ぶのは難しいので，こうした本に接することが出来るのは学びの方向に安心感を持たせてくれるからです。

そこで，これを基に，エクセルを使って東大教師の専門分野から著者と本を検索出来るように書誌データ画面と検索画面を作成して，主題アクセスデータベースを作成する試みをしました。

もちろん，公共図書館や大学図書館，或は，国立国会図書館にアクセスしてオンライン閲覧目録(OPAC)を使って言葉による主題検索するとヒットした情報を得ることが出来ます。しかしながら，ヒットしたリストから著者と著者の関連を読み取って，判断して，「その分野の研究の奥行きを垣間見せてくれるような本」を選ぶのは容易

ではありません。これから専門分野の本に接し学んで行くのですから。

そこで，こうした「ブックガイド」を使って本に接しておくことは効果的と思われます。もちろん，こうした案内書もいくつか刊行されていますが，「新入生にすすめる本」に見られる設問を含んでいるようなガイドブックはなかなか見当たりません。

それ故，この「新入生にすすめる本」を基にしています。自分仕様データベースを作成するのは，こうしたガイドブックを活かして学びを自分自身で自分を後押ししようというねらいです。

２　小中高生の情報源と専門家の文献収集方法

この章では，本との出会い，資料収集方法といった観点から，小中高生の例と，哲学者と翻訳家の例が身近な情報源の新聞記事に掲載されていましたので，「大学の新入生にすすめる本」に関連して，すなわち，共通点や相違点が見いだせるかもしれませんので，これらの新聞記事を一部引用しながら取り上げていきます。

最初は，14 歳の中学生の例です。

14 歳の中学生は，「教科書は中学生の重要な情報源」と新聞の「声」欄に投稿しています。以下，「声」から最初と最後の段落の部分を引用します。

「社会科の授業が好きです。歴史や外国の事情を知るのがとても面白いからです。歴史は戦争の話もあって，楽しいものばかりではありません。でもそれを学ぶことで未来の平和へとつながっていくと思うとやる気が出ます。だから，教科書は私たち中学生には重要な情報源です。」「私は，新聞やニュースに関心がある方です。それでも教科書の存在は大きいです。」(4)

次は，課題図書という本との出会い方です。

データは少し古いですが，「全国の小中学校向けに本を卸している図書館流通センターによると，１～６月の単行本の注文ベスト 10」は，「全国学校図書館協議会など主催の青少年読書感想文全国コンクールの課題図書が４位までを占めています。」という記事が，「Q　学校図書館にはどんな本があるの？」の答え (A) として掲載されています。(5)

最後は，「生徒自身が選んで購入」(6)の場合です。

これは，「「読みたい本は自分で買ってこよう！　こんなスローガンで，愛知県豊川市立代田中学校は５年前から，市内のもう１校とともに「マイブックプロジェクト」に取り組んでいます。」」というものです。

「学校側が読書週間に合わせて用意した特製図書カード（２千円分）を使って，生徒自身が校区内にある三つの書店に本を買いに行きます。購入した本は学級文庫に収め，朝読の時間などに読みます。」

これは，2009 年４月５日の記事ですが，具体的な本の例としては，「ドラマ化された『流星の絆』(東野圭吾著，講談社，1785 円)」，『スピン』，『オール』(山田悠介，角川書店，1150 円)，『図書館戦争』(有川浩著，アスキー・メディアワークス）などが紹介されています。

情報源としての教科書は大学の新入生にも共通のものとして考えられそうです。

次は，哲学者と翻訳家の資料収集方法の場合です。

『日本経済新聞』の「読書」の「半歩遅れの読書術」に，著名な哲学者と翻訳家の例が掲載されていましたので，一部引用しながら取り上げて行きます。

最初は哲学者の場合です。

「私はだいたい３か月から半年単位ぐらいの感じで，新しい分野に興味を持つ。」「かつてならば（もちろん今でも）その道の専門家と出会うことなどで興味が芽生え，そして教えてもらう，という形で事態は進行したのだが，今日では，ネット上での関連書籍リスト，カスタマーレビューなどを手操りながら２，３日も研究すれば，だいたい，どの書籍が中心的基本文献で必読書かの見当がついてしまう。」(7)

そういえば，NHK テレビで放送された「白熱教室」の１つで，マイケル・サンデル教授の著作の日本語訳『これからの正義の話をしよう』の参考文献は非常に多様な分野の本が挙げられています。主題分野は政治哲学ですが，主題分野の幅には共通性が見られます。

次は，翻訳家の場合ですが，同じく「半歩遅れの読書術」に資料収集方法が掲載されていましたので，同様に一部引用して紹介します。

「私も人にひけをとらないマリリン・ファンだったことになる。ところが，いざ書こうという段になってハタと気づいた。参考書や資料がほとんど手元になかったのである。こうなれば因果な旅にでるしかない。つまり，職業病とも呼ぶべきマニアックな資料収集を新たに開始せよ，ということだ。」(8)

哲学者や翻訳家の資料収集方法は，利用者研究という

アプローチからでは，こうしたデータは容易に得られませんでしたので，職業人としての技術の蓄積が伺えるものでした。

3　人文学，社会科学分野における主題領域

対象とする主題分野は人文学，社会科学分野です。この「新入生にすすめる本」には，自然科学分野の執筆者も多く掲載されていますが，自然科学分野を対象にした利用者研究はこれまでにも多くの研究がなされてきていますので今回は対象外にしています。

人文学，社会科学分野とは具体的にはどのような主題分野になるのだろうか。国語辞典や『日本十進分類法』(NDC) 新訂 10 版を使って確認しておきましょう。

『広辞苑』第六版では人文科学のもとに以下のように定義しています。

「自然科学・社会科学に対して，哲学・歴史学・文学など人間文化を研究対象とする学問の総称。人文学，文化科学。」(9)

NDC では，哲学は１類（ここには心理学，倫理学，宗教も入っています），歴史は２類（ここには，歴史，地理，地誌も入っています），芸術は７類，言語は８類，文学は９類に位置づけられています。NDC には，人文学，或は，人文科学という分類項目名はありません。

社会科学については，『広辞苑』第六版では次のように定義しています。

「社会現象を対象として実証的方法によって研究する科学の総称。政治学・法律学・経済学・社会学・歴史学・文化人類学およびその他の関係諸科学を含む。」(10) となっています。

NDC には，社会科学がひとつの分類項目名としてあり，300 社会科学，以下 310，320・・・と展開され，政治，法律，経済，財政，統計，社会，教育，民族，民俗，国防，軍事など 390 番台まで展開されています。

NDC は我が国の図書館で広く使用されている分類法で，資料の組織化，主題分野の組織化を行う際の標準的な拠り所になっています。あらゆる主題分野を０（ゼロ）と１から９までのアラビア数字を使った十進法で分類，展開し，その数字に主題を位置づけ，主題の展開は階層構造になっています。

哲学，心理学の分野と社会科学の分野，特に社会思想，経済，社会，教育の各主題分野に著者名がリストされています。哲学の分野では西洋哲学の体系によっていて，著作並びに研究書を特定の分類記号のもとに例示しています。社会科学の分野でも「理論的な著作が多い」ということで，上記の分野では著者名をリストし，固有の分類記号を与えています。

例えば，経済学の分野で，ケインズは社会科学分野の経済学のケインズ学派のところに位置づけられています。ケインズの著作，ケインズに関する著作は NDC の分類記号 331.74 を使います。

文学の分野では同様に人が重要ですが，江戸時代の作品の著者，例えば，松尾芭蕉や井原西鶴は固有の分類記号のもとに掲載されていますが，現代の作家の村上春樹や吉本ばななには固有の分類記号は付与されていません。

4　人文学，社会科学分野の学問的特性

文部科学省，科学技術・学術審議会学術分科会は「人文学及び社会科学の振興について（報告）－「対話」と「実証」を通じた文明基盤形成への道」(11) を２年近くにわたって審議をかさね，この報告をとりまとめています。

これは「国が人文学及び社会科学を振興する観点から諸施策を検討していくに当たり，適切な施策を構想することができるように，人文学及び社会科学の特性や役割・機能を明らかにするとともに，これを踏まえた施策の方向性を示すもの」(12) となっています。

目次は以下の４章からなっています。

第一章　日本の人文学及び社会科学の課題
第二章　人文学及び社会科学の学問的特性
第三章　人文学及び社会科学の役割・機能
第四章　人文学及び社会科学の振興の方向性

第一章では，日本の社会科学の在り方に関して，これまでも，そして，この「報告」でも，課題でもあり，「課題に入る前提として」も，西洋の学問の輸入の問題が指摘されています。

それは，「「日本の近代化の過程において，近代西欧起源の「学問」を受容・継承した，いわゆる「輸入」したという歴史」」(13) という問題です。

これについては 1980 年代の著作でも言及されています。例えば，石田はその著作『日本の社会科学』で次のように書いています。

「日本社会の工業化が西欧に追いつけ追いこせという形で西欧化からの技術導入によって急速になされたのと並行して，日本の社会科学もまた西欧理論の急速な摂取によって特徴づけられている。」(14)

この記述は，「むすび―日本の社会科学の反省―」の章で書かれていますが，その後では，「このような形での西

欧理論の導入が反動を招く過程」(15)などが展開されています。

上記の「報告」でも，第一章の課題で，３つの視点の１つとされる「研究水準に関する課題」の第一節の中で次のように言及しています。

「欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりするタイプの研究が，日本において有力な研究スタイルとなってしまっており，このことは日本の人文学及び社会科学が克服すべき大きな課題になっている。」「これは，・・・近代化の過程で日本が欧米の「学問」を受容したという歴史的経緯がもたらした日本の「学問」の在り方であり，その影響は分野によって異なるが，今日に至るまで継続していると考えられる。」としています。(16)

次の第二章では，人文学及び社会科学の学問的特性を対象，方法，成果，評価の視点からとらえています。

最初に，第一節の対象から引用し，次に，第二節の方法から引用して，人文学及び社会科学の学問的特性がどのように捉えられ，まとめられているかをチェックしていきます。

以下，少し長いですが，著者と著者との関連を考える上で重要ですので，研究対象について引用していきます。(17)

「人文学は人間の精神や文化を主な研究対象とする学問であり，社会科学は人間集団や社会の在り方を主な研究対象とする学問である。」

「第一に，人文学及び社会科学の研究対象は，基本的に人間によって作られたものであることを確認しておきたい。このため，研究対象に関する「知識」は，歴史的，文化的な制約を受けながら，特定の歴史的，文化的な枠組みの中で生み出されることに留意しなければならない。」

「第二に，人文学においては，哲学や思想といった「価値」それ自体が研究対象となるとともに，社会科学においても，社会を構成する人々や集団の意図や思想といった「価値」に関わる問題を取り扱っている。」

「さらに社会科学が，研究対象としている社会現象については，その構成主体である人間の意思や意図によって，現象自体が変化するという性質を持ってる。・・・

このため，人間の行動のみならず，行動の背後にある意思，価値判断等について研究の対象にしなければならない。即ち，社会科学では，構成主体の行動の相互作用に関する因果関係のみならず，行動の背後にある「意図」の形成に関する因果関係の解明が必要ということになる。」

次は，研究方法についてです。(18)

「人文学及び社会科学は，自然科学のよう「証拠」に基づき「事実」を明らかにするとともに，「論拠」を示すことにより「意味付け」を行うことも目指すものである。」

「このような意味で，人文学及び社会科学の方法を考えるに当たっては，「実証性」とともに「説得性」を問題として取り扱わなければならない。特に，人間や社会の存り方を把握するためには，人間の意図や思想といった「価値」に関わる問題を避けて通ることはできないことから，人文学及び社会科学の研究を進めるに当たっては，実証的な方法による「事実」への接近の努力とともに，研究者の見識や価値判断を通じた「意味付け」を行うことが不可欠である。

以上を踏まえ，人文学及び社会科学の研究方法の特性を考えると，言葉による意味付けや解釈という研究者の見識や価値判断を前提とした研究方法と，人間の行動や社会現象などの外形的，客観的な測定を行う研究方法とが併存することになる。」

以下は，筆者が行った２つの利用者研究の事例ですが，人文学，社会科学分野における利用者の文献との出会い，文献の入手方法から伺えるのは，上記のような研究対象，研究方法の在り方が，特定の主題を表わす語彙，キーワードを使って網羅的に文献検索して資料を入手することよりも，指導教授や恩師のこれまでの知見による文献指導への信頼を博士課程の大学院生に与えていると考えられます。

具体的には，英国と日本の博士課程大学院生の博士論文作成に見られる文献探索，文献入手の方法についてです。

１つは，英国の詩人テッド・ヒューズを研究対象に論文を提出した英国シェフィールド大学の博士課程の大学院生の例です。

アンケートやインタビューを通して，オリジナルなアイディアの生成についていくつかの質問をしています。文献探索に関しては，二次資料を使って必要な文献を調べるというようなシステマティックなアプローチは採らなかったこと，必要な文献は指導教授から教えられたこと，それによって博士論文への見通しが得られたと語られています。

必要な資料が大学図書館にあるかどうかについては大学図書館の OPAC を利用したと述べていますが，キーワードを使って大学図書館の OPAC で網羅的に文献検索するということはしなかったと述べています。(19)

もう１つの例は，英国のシェフィールド大学で出会った政治学を専攻する博士課程在籍の日本の研究者の事例

で，主題分野としては大衆社会をテーマにしています。文献探索については，「恩師」の文献，恩師から紹介された文献を挙げています。(20)

この例でも必要な資料が図書館にあるかどうかの所蔵調査はしていますが，研究過程の中でキーワードを使って文献を網羅的に探すという行動はしていませんでした。

２つの例とも修士課程からテーマを発展させて研究していますので，どのような資料があるかについては周知していますので，キーワードを使って網羅的に文献を探すことはしていません。

こうしたことを考えると，２つの事例だけとはいえ，文献の入手にあたっては，指導教授や恩師の役割が非常に大きく，特定の主題を表わす語彙をキーワードにして，データベースを使って文献を網羅的に探すような情報探索行動は見られませんでした。

５　「東大教師が新入生にすすめる本」の構成

「東大教師が新入生にすすめる本」の構成は，はじめにでみたように，以下のようになっています。１ 私の読書から―印象に残っている本（専門分野にかぎることなく自由に） ２ これだけは読んでおこう―研究者の立場から（新入生が専攻を選ぶときのヒントになる本，またはその専門分野へのイントロダクションになる本，その分野の研究の奥行きを垣間見せてくれるような本） ３ 私がすすめる東京大学出版会の本 ４ 私の著書

このブックガイドは，人文学，社会科学分野における専門分野にはどんな著者がいて，どのような本が出版されているのかが案内されています。

しかしながら，これを，大学の新入生だけでなく，それぞれの専門分野の本を選び，読んでいこうとする人たちにとって，どのように本を選択し，その選択が「その分野の研究の奥行き」を見渡すことが出来，従って，その選択の揺れが大きくはずれてしまわないように本を読みすすめていけるかのような，指導教授からこの本を読んで行っても良いというお墨付きをもらったかのような一覧表として使えるようにしたい，という願いがあります。

著者と著者の「関連」を意識づけてその著作を発見できるように，しかしながら現段階ではこれが機能できるかどうかという課題はありますが，エクセルを使って表２の検索画面から表１の一覧表を検索出来るようにしました。

ここで使っている「関連」は，「報告」の第二章で使われている「関係性」，「関係性の束」と区別して使っています。

第二章の「関係性」，或は，「関係性の束」という用語は，以下のようなことから来ています。

「人文学及び社会科学のうち，特に社会科学を中心に，「社会構造」（「社会制度」を含む），「社会変動」及び「社会規範」が研究対象とされている。」そして，「「社会」を「他者」との「対話」の場として，また，「他者」との「対話」の結果としての「『関係性』の束」としてとらえていると指摘したい。」(21)と記述されています。

６　エクセルによる一覧表の構成と検索機能

「東大教師が新入生にすすめる本」の４つのアンケート項目を使って，それぞれを著者名と書名（タイトル）に分けて，エクセルの表１に一覧表を作成し，表２から専門分野名と著者名を使って検索できるように検索画面を作成しました。

表１の一覧表のタイトルは人文学・社会科学分野における専門分野別著者と著者が選んだ本:「東大教師が新入生にすすめる本」からです。

表２の検索画面は，この画面から表１の書誌情報をキーワード（専門分野名と著者名）検索できるような画面になっています。表１の名前は書誌データ，表２の名前は検索画面という名前になっています。検索画面のキーワード入力の枠（セル）は１つの枠（セル）だけです。

専門分野名は「新入生にすすめる本」に記載されている名前をそのまま使っています。国立国会図書館（NDL）の件名標目（NDLSH）や日本図書館協会（JLA）編集・発行の『基本件名標目表』(BSH）に準拠してキーワードを統一標目にする作業はしていません。

そこで，東大教師の専門分野名の一覧表を作成しました。専門分野名で検索する際に参照できるように，「書誌データ」表１（画面）と「検索画面」表２ともに利用出来るように表３にリストしています。

表３に入力している範囲は1994年から2000年までと2015年，2016年までです。以降順次入力する予定です。年度を越えて専門分野のかさなりがありますが，新しい専門分野名もあります。

「検索画面」が持っている検索機能は以下のようになっています。

検索項目は著者名，新入生にすすめる本の著者名，書名などから検索できますが，完全一致検索です。

東大教師名や専門分野名から検索出来ます。新入生にすすめる本の著者名からも検索出来ますので，すべての検索項目から検索出来ますが，完全一致検索ですので，

語の一部だけを使って検索してもヒットしません。書名欄のセルには出版社と出版年が一緒に入っていますので，書名だけでは検索できません。

書誌データにリストされている東大教師の小林真理から検索出来ますが，すすめられた本の著者の夏目漱石からも検索出来，小林真理の著作が表示されます。

こうした表示に著者と著者の間の「関連」が見られると考えています。特定の著者が特定の著者の本を紹介していますので，この間の関係を「関連」としてみていますが，関連度が表示されているわけではありません。

検索画面には1件しか表示できませんので，全体で何件ヒットしたのかわかりません。そこで，この画面にヒットした件数を表示する機能を付加しています。ヒットのしるしを1とし，ヒット件数を数えています。

7　課　題

1）書誌データの入力量

現在のところ書誌データの入力が十分ではありませんので，書誌データを蓄積していくことが課題です。

2）書誌データに評価情報，関連度は付与されていません。

東大教師が本を「すすめる」ことによって，例えば，経済政策，社会政策，教育政策などの分野では，社会科学分野における著者自身の価値判断が反映されるという学問的特性がありますが，これに対応した学派別などの評価情報，関連度を付加・表示する機能はありません。

紹介された本の著者名からも検索出来，紹介者とその本のタイトルが表示されますが，関係性の結び付き度，関連度は表示できません。

社会科学分野の例では，マクロ経済学を研究して著作を出版している研究者はたくさんいますが，そうした紹介があった上で，この本がお勧めです，と文献リストに紹介されているわけではありませんので，評価情報が付加できると良いと考えられますが，現時点では出来ていません。

8　おわりに

自律した学びを進めていく上で本との出会いは欠かせません。

しかしながら，人文学や社会科学の分野においては，本との出会い，資料の収集行動は自然科学の分野のようにデータベースにアクセスして，キーワードを使って検索して，網羅的な一覧表を得て，そこから文献を選ぶのとは異なる面があります。

人文学分野における研究者の解釈による論文生成，社会科学分野における研究者の価値判断による論文の生成，学派の形成等は自然科学の分野とは異なっています。

今回はこうしたことを考慮しながら，エクセルを使って，人文学，社会科学分野における主題アクセスデータベースを「東大教師が新入生にすすめる本」を基に作成する試みをしました。

自分仕様のデータベース化にすることで手軽に変化に対応できると考えられます。

謝　辞

この著者リストを作成するために「東大教師が新入生にすすめる本」(『UP』) を使用しました。著者をリスト化する趣旨を東大出版会に問い合わせたところ，使用しても良いと返事をいただきました。

また，エクセル関数の知識については，『日経 PC21』(雑誌) やその付録等々から学んだことが多く，こうした知識なしにはデータベース化が出来ませんでしたので，その関数の使用について問い合わせたところ（株）日経BP社から許諾を得ました。記して感謝申し上げます。

(注)

自分仕様のデータベース化の例が次の文献に見ることが出来ます。

＜書誌情報＞

室城秀之「日本の古典文学とデータベース—和歌のデータベース—」

白百合女子大学言語・文学研究センター編『アウリオン叢書』09　語学・文学研究の現在 Ip. 11-23

ここには次のような記述が見られます。

「大学院生として文学研究を心ざす[原文のまま]皆さんも，それぞれが自分の研究に応じたデータベースを作って，それを使いこなすことが，研究の質や領域を変えていくことになると思います。」p. 11

「私は，平安時代の文学を研究しているので，新編国歌大観や私家集大成のCD・ROMから得られる膨大な情報のすべてが必要なわけではありません。」p. 16　そこで，「マイ・データベースを作る」p. 16　「一旦このようなマイ・データベースができると，その後は，自分の研究領域が変化するのに従って，必要に応じてデータをふやすことが可能です。」p. 20 (注) アンダーラインは筆者

表１　書誌データ

人文学・社会科学分野における専門分野別著者と著者が選んだ本:「東大教師が新入生にすすめる本」から

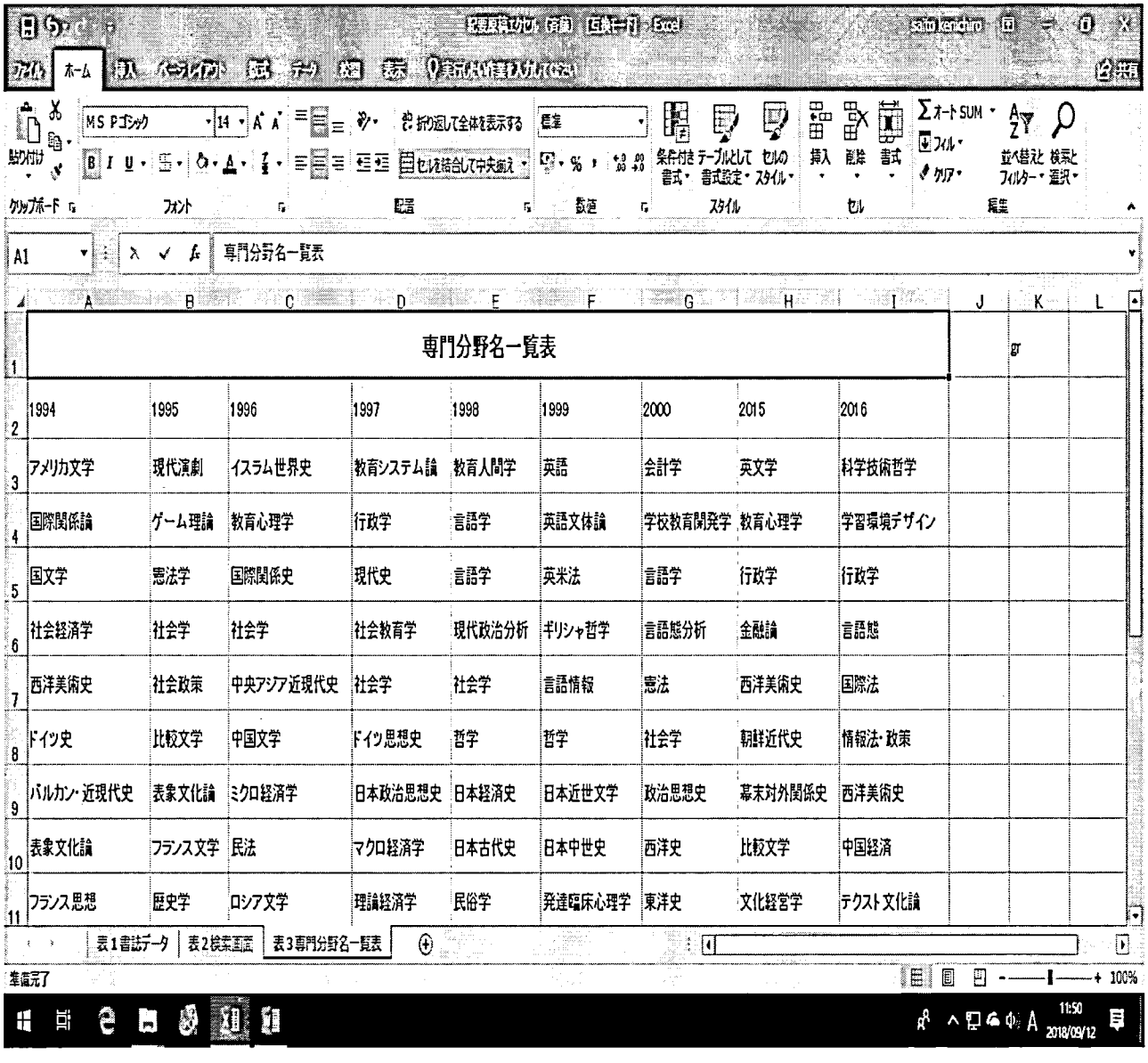
	文献番号	東大教師	専門分野	専門分野	著者(東大教師)	東大教師の著作(書名)	印象に残っている本の著者	印象に残っている本	研究者の立場からの本の著者	これだけは読んでおこう研究者の立場から	すすめる本の著者	著者のすすめる東京大学出版会の本
0	1	秋山聡	西洋美術史		著者(東大教師)	『聖遺物崇敬の心性史:西洋中世の聖性と造形』講談社選書メチエ 2009	山口昌男	『道化の宇宙』白水社 1980	高階秀爾	『美の思索家たち』青土社 1993		講座日本美術史全6巻 2005
0	2	植阪友里	教育心理学		著者(東大教師)	『カリキュラム・イノベーション:新しい学びの創造へ向けて』東京大学出版会	ミヒャエル・エンデ	『モモ』岩波書店、1976	市川伸一	『学ぶ意欲とスキルを育てる:いま求められる学力向上策』、小学館 2004	美馬のゆり・山内祐平	『「未来の学び」をデザインする:空間・活動・共同体』、2005
0	3	植田和男	マクロ経済学	金融論	著者(東大教師)	『ゼロ金利との闘い:日銀の金融政策を総括する』日本経済新聞社 2005	スティール・ヴェンカテッシュ	『ヤバイ社会学:一日だけのギャング・リーダー』、東洋経済新報社 2009	野口悠紀雄	『戦後日本経済史』、新潮選書 2008	堀内昭義ほか編	堀内昭義ほか編『日本経済:変革期の金融と企業行動』、2014
1	4	小林真理	文化経営学	文化政策学	著者(東大教師)	『文化権の確立に向けて一文化振興法の国際比較と日本の現実』、勁草書房 2004	夏目漱石	『吾輩は猫である』、岩波文庫	木下直之編	『芸術の生まれる場』、東信堂 2009	宮本久雄・金泰昌編	『文化と芸能から考える公共性』2004、公共哲学15

表２　検索画面

キーワード検索画面(専門分野と著者名による書誌情報検索)

キーワード入力 →		文化政策学	ヒットのしるし	ヒット件数
	書誌情報		1	1 件
書誌番号	4			
東大教師	小林真理			
専門分野	文化経営学			
専門分野	文化政策学			
著者名(東大教師本人)	著者(東大教師)			
東大教師の著作(書名)	『文化権の確立に向けて一文化振興法の国際比較と日本の現実』、勁草書房 2004			

表３　専門分野名



専門分野名一覧表

1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2015	2016
アメリカ文学	現代演劇	イスラム世界史	教育システム論	教育人間学	英語	会計学	英文学	科学技術哲学
国際関係論	ゲーム理論	教育心理学	行政学	言語学	英語文体論	学校教育開発学	教育心理学	学習環境デザイン
国文学	憲法学	国際関係史	現代史	言語学	英米法	言語学	行政学	行政学
社会経済学	社会学	社会学	社会教育学	現代政治分析	ギリシャ哲学	言語態分析	金融論	言語態
西洋美術史	社会政策	中央アジア近現代史	社会学	社会学	言語情報	憲法	西洋美術史	国際法
ドイツ史	比較文学	中国文学	ドイツ思想史	哲学	哲学	社会学	朝鮮近代史	情報法・政策
バルカン・近現代史	表象文化論	ミクロ経済学	日本政治思想史	日本経済史	日本近世文学	政治思想史	幕末対外関係史	西洋美術史
表象文化論	フランス文学	民法	マクロ経済学	日本古代史	日本中世史	西洋史	比較文学	中国経済
フランス思想	歴史学	ロシア文学	理論経済学	民俗学	発達臨床心理学	東洋史	文化経営学	テクスト文化論

引用文献

(1) アンケート　東大教師が新入生にすすめる本
UP　第四七巻四号（通巻五四六号）
二〇一八年四月五日　p[1]

(2) 同上　p[1]

(3) 同上　p[1]

(4) 「教科書は中学生の重要な情報源」　中学生　今井八彩　（東京都　14）
『朝日新聞』2014年（平成29年）10月9日　声

(5) 「Q　学校図書館にはどんな本があるの？」『朝日新聞』2008年（平成20年）7月6日
落第忍者乱太郎の学問のススメ

(6) 「生徒自身が選んで購入」
「中高生のためのブックサーフィン」
本と出合う　学校図書館にて
『朝日新聞』2009年（平成21年）4月5日

(7) 黒崎政男「「専門家対ネット」自分一人で必読書を追及」」
「半歩遅れの読書術」
『日本経済新聞』2010年（平成22年）10月17日　読書

(8) 小鷹信光「「因果な収集の旅」半世紀遅れのモンロー学」」
「半歩遅れの読書術」
『日本経済新聞』2011年（平成23年）5月8日　読書

(9) 『広辞苑』第六版　電子辞書版　岩波書店　c　2008, 2018

(10) 同上辞書

(11) 文部科学省，科学技術・学術審議会学術分科会
「人文学及び社会科学の振興について（報告）－「対話」と「実証」を通じた文明基盤形成への道」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1246378.htm
アクセス日　2011/02/16

(12) 同報告　はじめに　p. 1

(13) 同報告　第一章　p. 1

(14) 石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会，1984 p. 225

(15) 同書　p. 227

(16) 前掲報告　第一章　p. 1

(17) 前掲報告　第二章　p. 1-2

(18) 前掲報告　第二章　p. 4-5

(19) 斎藤憲一郎「英文学研究者はどのように研究を行っているのかーインタビューによる英文学研究者の情報の要求と利用の調査・分析」
三田図書館・情報学会研究大会発表論文集
p. 1-4　1998

(20) 斎藤憲一郎「一政治思想史研究者の情報探索行動と情報メディアの利用」
三田図書館・情報学会研究大会発表論文集
p. 1-4　1999

(21) 前掲報告　第二章　p. 3

参考資料

1 東大教師が新入生にすすめる本
『UP』　四四巻四号　（通巻五一〇号）　二〇一五年四月　p. 1-20

2 東大教師が新入生にすすめる本
同雑誌　四五巻四号　（通巻五二二号）　二〇一六年四月　p. 1-20

3 文藝春秋編『東大教師が新入生にすすめる本』
文藝春秋社，2004（文春新書　368）

4 マイケル・サンデル著，鬼澤忍訳（2010）　これからの正義の話をしよう：いまを生き延びるための哲学　早川書房

5 『日経PC21』日経BP社付録
『即効！早引き！エクセル関数事典2010&2007対応版』日経BP社　2012
『Excel関数ワザ大事典』日経PC21　2016